



Title	物の思想史：言葉、もしくは、経験という現場から
Author(s)	沈, 恬恬
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59400
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【10】

氏 名	沈 恬 恬
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 5 3 1 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	物の思想史 ― 言葉、もしくは、経験という現場から ―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 富山 一郎 (副査) 教 授 川村 邦光 教 授 三谷 研爾

論 文 内 容 の 要 旨

沈恬恬氏提出の本論文は、「はじめに」も含め、全六章の構成からなる。参考文献は六百点におよび、言語も日本語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語にまたがっている。この大作の全体における主題は、経験という問題であり、いいかえれば物において構成され

る言葉の問題が理論的に検討されている。そしてそこでの最も重要な論点は、物は言葉において構成されるのではなく、言葉が持つ文脈を拒絶するという点であり、それはいわば、物から既存の言語秩序の文脈を超えた言葉が生成する可能性でもある。本論文はこうした物の可能性を、「物の思想史」として押し出そうとしている。また経験という言葉はこうした物によって言葉が生成する領域として設定されている。

こうした問題設定において本論文で一貫して取り上げるのは、ナショナリズムである。第一章と第二章は本論文の問題意識にあたる。そこでは問いとして日本と中国の間における言葉の問題、翻訳の問題、植民地支配の記憶、戦争責任などについて言及があり、具体的には反日運動における日貨のボイコット、植民地支配を問う証言集会の場面、慰霊碑の建設といった具体例が自らの経験とともに問いとして提出されている。たとえば、なぜ日貨をボイコットすることと反日がつながるのか。そこには物をメッセージに変える言語秩序が前提になっているのではないか。そして物はこの言語秩序を拒絶しながら、別の言葉を発しているのではないか。こうした問いにおいて、物が言語的メッセージの根拠になると同時に、メッセージをメッセージとして成り立たせる秩序自体をはみ出して契機にもなり得ることが、本論文の論点として提示されていく。その上で第二章の後半では、この論点を、無字碑という何もかかれていない碑という問題として設定している。何も記されていない碑は何を語っているのか。この再設定された問を本論文では、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論の古典である『想像の共同体』の冒頭部分にある、「無名戦士の墓」の部分の再読へとつなげていく。

第三章と第四章では、マーシャル・マクルーハンのメディア論あるいはフランツ・ファノンのラジオにかかわる記述が検討されている。そこでの論点は、アンダーソンのナショナリズム論とヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学との関連性にある。いいかえればそれは、ナショナリズムの根拠としてアンダーソンが提示した物が、ナショナリズムを超える契機にもなり得るという問題であり、いわばアンダーソンがベンヤミンとの関係において言及しながらも自らは書くことのなかった物の言葉の可能性という課題である。そして本論文では、まさしく物の言葉をキャッチし続けた思想家として、メディア論の大家であるマクルーハンを浮かび上がらせる。そこでは、媒体は意味を運ぶのではなくそれ自体で意味を担うというマクルーハンの有名なテーゼを手がかりに、媒体それ自体の物としての可能性が検討されている。またこうしたマクルーハンへの言及は、同時に、メディア研究者がしばしば安易に言及する、アンダーソンの出版資本主義に対する批判でもある。

終章になる最後の第五章では、物の言葉を書く作業について検討している。そこで取り上げられるのは、旅日記あるいはフィールドノートという領域であり、具体的にはジェームズ・クリフォードのフィールドノート、あるいは旅を書き続けたヴィクトル・セガレンの作品である。この検討において、物に出会った経験が言葉において統制され意味が確定するその手前において、ノートを書き続けるという行為の可能性が浮かび上がる。それは意味としては完結しない記述であり、ただ旅の徴候あるいは証明として収集され並べられた

だけの言葉とその媒体としてのフィールドノートという問題である。ここに、物の言葉を求めながら物を拾い集め、断片化された言葉を収集し続ける旅として、物の思想史が浮かび上がる。そしてこの旅としての物の思想史において、ナショナリズムにかかわる最初の問いは、ベンヤミンのパサージュ論の記述、ならびにベンヤミンが用いた手帳の可能性において論じられることになる。

論文審査の結果の要旨

ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論は、出版資本主義をはじめとする運用しやすい理論的側面において要約され傾向にある。それは同時に、アンダーソンにおける死の問題やベンヤミンへの言及が正面から議論されることなく放置されることにも結びついている。この放置された課題は、いわばアンダーソンにおけるベンヤミンの水脈であり、同様の問題はジェイムズ・クリフォードをはじめとする文化研究においても存在する。本論文がなしたのは、横断的に存在する諸研究において断片的になされるこうしたベンヤミンへの言及が、いかなる思想的可能性をもつのかという問題を、物の思想史としてあぶりだした点にある。こうした理論的作業は、ホミ・K・バーバなどにより一部なされているといえるが、本格的な検討ははまだ存在しない。またこうした検討作業の結果、アンダーソンの『想像の共同体』が物を根拠においた根源的なナショナリズム批判の書であることが明確になった。と同時にいくつかの課題も明らかになった。第一に、フェティシズムあるいは商品物神にかかわる議論と物の思想史との関係性は、一部検討されているが、いまだ不十分である。また今後、物の言葉を拾い集めるという本論文の視座に基づき、具体的にどのような思想史を描くのかという点についても、課題が残る。しかしながら、こうした課題を残しながらも、理論的に物の思想史という領域を明確にしたという検討作業は成功しており、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。